
G O N G

ナット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G O N G

【Nコード】

N 4 0 1 2 Q

【作者名】

ナット

【あらすじ】

罰ゲームで製作した超短編です。

元ネタはJAMプロジェクトの「G O N G」

（前書き）

罰ゲームで製作した超短編です。

元ネタはJAMプロジェクトの「GONG」

打ち上げを待つ宇宙戦闘機「サンダーソード？」のドライバーシートに身を預け、僕はまだ夜の地平線をぼうつと眺めていた。

「つ、付き合ってください！」

あれはもう6年も前の夏。7月初旬だというのに40度越えのうだるような暑さのなか、照り返しのきつい校舎屋上で、僕は初めての告白をした。

初めての恋だった。一目惚れだったし、告白なんてしたのも最初だった。だからガチガチで、上の台詞だつてつかえつつかえで、とても聞けたもんじゃなかった。そして、失敗したろうなあという妙に醒めた気持ちがあつて、それで怖くて、90度に曲げた腰をなかなか持ち上げることは出来なかった。

「うん、いいよ」

そんな、数十分にも感じた数秒に終わりを告げたのは、少し困ったような、照れたような彼女の声だった。

まず、意味を理解するのに数秒かかって、次に聞き間違いだと思つた。勢いよく頭を跳ね上げると、はにかんだ彼女と目が会つた。

「え、あ、は」

それで、ひりだした声は頼りなさ満点。間の抜けた声しか出せないくて、それを見て彼女は笑い出した。

そうして、高校2年生の夏。僕らは付き合うことになった。

時間は流れる。

それから3年がたって、僕は大学生になっていた。彼女は家業の大衆食堂を手伝うということで、進学はしなかった。東京の大学へ

進んだ僕は遠距離恋愛をすることになり、特にピンチの訪れることもなく平穩無事に、ここまで恋人関係を保ってきていた。誘惑に負けそうになったことは多々あったが、屈しなかった僕をほめてやりたい。

そんなときだった。”彼ら”が来たのは。

『衝撃！太平洋ハワイ沖に隕石落下』

そんな見出しが新聞におどった翌日に、ホワイトハウスが消滅した。

異星人との戦争が始まった。隕石は、異星人の侵略用ロボットだった。

最初はピンと来なかったけれど、徐々に異星人の勢力が日本に近づくにつれて、嫌でも実感させられることとなった。

最初に、北海道が占領された。この時点で、世界の半分は”彼ら”の手に落ちていた。最初の隕石落下から、まだ2ヶ月しか経っていないかった。

5年がたった。

がけつぶちの人類は、一人の天才科学者の提唱した理論によってその種をつなぎ、地上から異星人を退け、戦いの場は宇宙へと移っていた。

天才科学者の理論は、スキルファイターと呼ばれる超高性能戦闘機を作り出した。異星人の侵略ロボットに打ち勝てるのは、スキルファイターだけだった。

僕は地球防衛軍の門戸を叩き、スキルファイターのパイロットとなった。

正直大学なんていつてる場合じゃなかったし、守られる側と守る側になるんだったら、僕は護る側になりたかった。僕だって男だっ

てことだ。

そして、彼女が上京してきた。この騒動で、大衆食堂はたたまざるを得なかったそうだ。ともかく、自分にとっての守る対象が傍にいてくれるというのは、心強かった。僕は彼女を守っていたし、彼女も僕を守ってくれていた。自覚があったかどうかも怪しいが。

僕がパイロットに正式に任命された頃、戦争はすでに最終局面へと突入していた。劣勢だった人類軍は異性人軍を押し返し、ついに敵本星へと攻め込む最終作戦の発令を待つばかりであった。僕たちは、その作戦に投入されることとなった。

「じゃあ、いつてくる」

作戦が発令された。僕が自由に過ごせる時間は、もうわずかだ。僕は最後の休暇を彼女と過ごした。いろいろな話をした。そして、初めて彼女を抱いた。もう、思い残すことはなかった。

嘘だ。未練たらたらだ。心の底では、まだここにいたい。彼女とまだまだ話をしたい。まだまだ、まだまだ。でも、思い残すことはない。ないんだ。

こみ上げてくる熱い思いを胸の奥底にしまいこんで、僕は別れを告げた。

「かえって、くるんでしょう？」

彼女は、そういつて僕に微笑んだ。彼女は強い。僕なんかよりずっと。でも、あの時彼女は、微笑みながら顔を涙でくしゃくしゃにしていた。

「泣くなよ。必ず帰ってくるさ」

僕は人差し指で彼女の涙をすくってやると、今自分にできる最大限の笑顔をつくって見せた。

「帰ってきたら、一緒にレストランをやるんだろ？君の夢は、僕の夢でもあるんだぜ？」

「……うん」

恥ずかしい台詞を言っているのは、自分でもよくわかる。でも、本心だ。今まで、幾度となく僕を助けてくれた彼女に、唯一できる恩返し。

「必ず、僕は帰ってくるよ。絶対、必ずだ。僕が嘘ついたことあった？」

そう真面目な顔で僕が言ったものだから、彼女は軽く噴出して、「いっぱい、あつたじゃない」

といった。僕は「そうだったけ？」と頭をぼりぼりかく。最後に彼女の素の笑顔を見ただけでも、満足だ。

「でも、今度は本当。本当の、本当。僕は、絶対帰ってくるよ」

真剣な僕のまなざしと、不安で押しつぶされそうな彼女の視線が交錯した。どちらからでもなく、唇を重ねる。

僕は、ぎゅっと彼女を抱きしめた。彼女も負けじと腕を回し、僕らはしばらく抱擁を続けた。つう、と僕の頬を冷たい物が伝う。拭うことはしない。拭う時間も惜しかった。

「それじゃあ、いつてくるよ」

数分間、僕と彼女はそうしていたが、やがて僕のほうから打ち切ると、ゆっくりと彼女を引き離れた。名残惜しそうな彼女の目を、まっすぐに覗き込んで、また別れの言葉を言う。

「あ」

彼女が何か言いたげにしていたが、僕はそれを遮って深々と一礼すると、踵を返した。今度こそ、本当に迷いはなかった。

「絶対に……絶対に、帰ってきてね！」

僕の背中に、彼女の声。いとしい彼女の声。でも、僕はもう振り返りはしなかった。涙でぬれた顔を彼女に見せるわけには行かなかったし、このまま振り返れば、僕はもう、二度と戦えなくなる。そんな気がして、僕は軽く右腕を上げた。

「絶対に帰ってくる。ほんのちよっと、待っていてくれ！」

僕は、嘘をついた。次元の壁を越えて、異星人の本星に直接殴りこみにいく今回の作戦で、僕らが生還できる見込みなんて万に一つだつてない。十中八九、宇宙の彼方が最後の場所になるだろう。

でも一方で、不思議と帰ってこれる気もした。彼女の手をとり、誓い合つた約束が、僕を導いてくれる気がしていた。

僕らは行く。力尽きて、遠く銀河の海に散ろうとも。今ここに僕という人間がいたことを彼女が覚えてさえいてくれれば、僕は死なない。僕が彼女を覚えている限り、僕は戦える。

『さあ、今こそ立ち上がれ、戦士たちよ！退くことを知らぬ、勇敢な戦士よ！今、未曾有の危機に立たされている地球を救わんと、名乗りを上げた鋼の戦士たちよ！』

……夜明けを待つて、僕たちはあの宇宙へと旅立つのだろう。キヤノピー越しに見える外は、まだ暗い。

『金色の翼を持つてはばたき、稲妻の剣をして敵を薙ぎ払え！』

人類軍の総司令が、猛々しい言葉を並べ立てて演説しているのを聴く。段取りでは、これが終わると同時に、発射秒読みに入る手はずになっている。これが、僕に残された最後の休息のようだ。

「彼女と、話できたか？」

「ああ。必ず帰るって約束を、取り付けちまったよ」

ガナーシートに座す相棒が、気遣いの言葉をかけてくる。手持ち無沙汰だったのかもしれない。さつきから操縦かんを握ったりはなしたりしていた。

「はは、そいつはなんとしても生き残らなきゃな」

「頼むぜ、相棒」

そついうと、彼は照れくさそうに「おうよ」とだけ返してきた。

そうこうしているあいだに、人類軍司令による演説は終盤を迎えていた。

『恐れるな！地球に住まうものとして、誇りを捨てず、滾る魂の燃え尽きるまで戦いぬけ！戦いの”G O N G”を今、高らかに打ち鳴らそう！』

総司令の演説が終わった。僕たちのサンダーソードにも火が入り、コンソール類がスタンバイモードからアクティブモードへと切り替わっていく。せわしくチェックを走らせていると、ついにカウントが開始された。

「……」

これが最後になるかもしれない安息の時間を、僕は静かに待った。宇宙服の中、胸から下げたロケット・ペンダントに手を添えてみる。キャノピー越しに空を見た。幾万の星がきらめく横で山の端が白み始め、徐々に朝日が昇ってくる。夜の部分と朝の部分が渾然一体となった空。大学の最初の休みに、買ったばかりのおんぼろ中古車で初めて彼女をドライブに誘って、二人で眺めた空にそれは似ていた。

「帰って来るさ、必ず」

僕は相棒にも聞こえないほどの小さな声でつぶやいた。必ず帰る。そのためにも、戦って、戦って、戦い抜いて、生き残るのだ。

稜線から眩い朝日が顔を出すのと同時に、カウントがついに0になる。僕は操縦桿を握り締め、歯を食いしばった。強烈な重力加速度が、僕をシートに縛り付ける。わずか数秒のあいだにキャノピーから見える景色は様変わりし、十数秒で宇宙空間に放り出された。「こちらスキルトウウェルフ。機体異常なし」

『スキルリーダー了解。これよりワープにはいる。全機、気を引き締めろ？次元断層にはさまれても、二階級特進はなしだ！』

小隊長の合図と共に、僕も自機のワープエンジンを起動させた。

必ず帰ってくる。守るべき未来と、愛を信じて――

本作戦参加艦艇数 : 3 4 0

同戦闘機数 : 2 5 0 0

動員数（非戦闘員含む） : 3 5 2 6 0 0

帰還機数 : 1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4012q/>

G O N G

2011年1月25日09時55分発行